

B-4				
主題	「入れてもらった」ではなく「自分で入れた」と思える入浴支援を目指して			
副題	次世代介護機器を使用して、持てる機能や生活習慣を大切に考えた入浴の取り組み			
キーワード 1	入浴	キーワード 2	次世代介護機器	研究(実践)期間 12ヶ月

法人名・事業所名	社福) 白十字会 特別養護老人ホーム白十字ホーム
発表者(職種)	上村信吾(介護職員)
共同研究(実践)者	深谷竜(作業療法士)

電話	042-392-1375	FAX	042-392-1255
----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	東京都東村山市の八国山緑地の豊かな自然環境の中にある白十字ホームは昭和42年に開設されたました。定員170名+ショート12名。施設で生きがいと安らぎのある住みよいホーム、地域社会に支えられ、地域社会に役立つホームを目指しています。コロナ禍の現在、窓越し面会を月100件以上行っています。
-------	---

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

介護保険制度が導入された2000年頃にできた高齢者施設では、当時の最新の機械浴とホテルのような大浴場の一般浴が設置される施設が多くあった。白十字ホームも2000年の増改築時には、寝たままの姿勢で入る寝台浴と数段の階段を下りて入る大浴場が設置された。長年その2つの入浴機器で入浴を行っていた。入浴設備の老朽化もあり「白十字ホームでの入浴の在り方について」検討が始まり「寝台浴」ではない「座位浴」「個浴」の取り組みを行った。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

介護リーダーが主となり「入浴プロジェクト」を立ち上げ現状の問題点と課題を明らかにする。

- ・立位は取れるのに数段の階段を降りられない利用者は寝て入る寝台浴になってしまう。
- ・自分で洗身できるのに寝た姿勢なので自分では洗えないし職員も洗ってしまっていた。
- ・洗い台に裸で寝ている利用者の多くは不安感や恐怖感(落下の危険)を感じていた
- ・浴槽内では身体が浮いてしまうので職員は常に身体を支えている状態
- ・週2回しか入浴が出来ない。

様々な問題点があげられ以下の3つの目標を設定し取り組みを開始した

- ① 寝台浴から座位浴への移行 ② 利用者の自立支援(入浴回数の柔軟化) ③ 職員の負担減

《3. 具体的な取り組みの内容》

平成30年度 介護ロボットを活用した介護技術開発支援モデル事業 報告書内での次世代介護機器導入に向けた9つのステップに基づき進める。

1. 情報収集 2. 導入取組に対する組織全体での合意形成 3. 実施体制の整備

4. 課題抽出作業 5. 導入計画作り 6. 試行的導入の準備 7. 施行的導入
8. 小さな成功事例の共有 9. 本格的導入に向けた準備

《4. 取り組みの結果》

寝台浴対象者40名の内25名を座位浴に移行するという目標値は達成された。本格導入後1ヶ月後に利用者、職員への聞き取り調査を行う。人体図を用いて自己での洗身の評価を行う。

- 入浴が嫌い・憂鬱と感じていた利用者から「安心して入れた」「好きになった」と言われた。
- これまで全介助で洗身を行って来た利用者が健側の手以外はほぼ自分で洗えることに驚いた。またいかにこれまで職員が自立支援に意識していなかったかを自覚する機会になった
- 日常的に立位が難しい方が個浴に入るために自らで努力するきっかけになった。
- 浴槽内では臀部が底について身体が浮かないので支える必要がなくなり職員の負担軽減になった。
- 取り組みに関してフロア内で頻繁に話し合う機会が増えたことで、その他の場面においても職員間で話し合う機会が増え、自立支援を目標にケアが行えるようになってきた。

《5. 考察、まとめ》

これまで数十年の間「普通の暮らし」という議論がされず障害のある人が仕方なく入る機械のお風呂だった。長い人生の中で誰もが体験してきた「普通の家のお風呂」に入る感覚を体験してもらえたことで、多くの利用者の方が、あーまたこうして家庭のお風呂に入れた。「入れてもらった」ではなく「自分で入った」という気持ちを感じてもらえるお風呂になった。また、時間の軽減にもなっていることから今後入浴回数の柔軟な取り組みも可能と考える。

「施設で生活される利用者の方々が、自分の持っている力を発揮できる場面があることが、生きている証でもあります」その場面を提供することが私たちの役割であり仕事だと思う。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

「最強の老人介護」三好春樹、講談社

平成30年度 介護ロボットを活用した介護技術開発支援モデル事業 報告書

《8. 提案と発信》

入浴機器を検討する中、設備の検討を始めるのではなく「利用者にどんなお風呂に入ってもらいたいのか。白十字ホームのお風呂はどのような事を目指すのか。」の検討・話し合いが大切だという事が確認できた。今後も機器をどう使っていくのか、利用者に職員にその機器でどのような入浴をしてもらうのか追及していかなくてはいけない。

平成30年からの「次世代介護機器の活用支援事業」の中で東京都が「導入経費補助」を、東京都保健福祉財団が「普及啓発セミナー」等を両者が相互に連携して行う体制がある。今回、白十字ホームは「アドバンスセミナー」というセミナーに参加し次世代介護機器導入の取り組みを行った。現在、マッスルスーツ、PARO、シルエットセンサー、愛移乗くんの活用に取り組んでいる。今後さらにアドバンスセミナーに参加しているや施設との情報交換や交流の機会を積極的に持っていきたい。